

『信越紀行』と下田歌子の父祖意識

— 付・東條琴臺石碑建立考

久保 貴子

一 はじめに

下田歌子自選の著作集「香雪叢書第一巻」紀行随筆『よもぎむぐら』(昭和七・一九三二年十一月 実践女学校出版部)は、下田が記した紀行文・随筆を二十編収載している。その中に掲載された『信越紀行』並びに「信越紀行後記」は、明治三十二(一八九九)年八月九日～九月七日の三十日間に及ぶ日次旅日記である。『信越紀行』には全八十二首(他者詠も含む)、「信越紀行後記」には全二十六首と一句(他者詠も含む)が収められている(以下、『信越紀行』の本文は、「香雪叢書」所収本に拠り、旧字体は新字体にあらためた)。これまで、この『信越紀行』は下田の伝記などで触れられることはあっても、その記述を中心に据えて論及がなされることはなかった。本稿は、この作品を読み解くことで、帝国婦人協会創立当時の下田歌子の活動の実態を探るとともに、その根底に

ある父祖意識について考察を試みたものである。

下田歌子は、明治三十二(一八九九)年五月に帝国婦人協会付 属実践女学校および女子工芸学校を設立した直後に、この旅に出発している。この旅の目的は、下田自身が『信越紀行』冒頭に、

みずぐかる信濃の国より、三越路の果までもと、思ひ越しぬるは、ひとへに我が女子達おんなたちの教の道のためなり、(中略)いと善き事、さらば、吾等も同じ心にと力添へて、諸心もろこころにいたづき励まざるゝ友達の助けにより、やがて、さす方にも至りつくよしもやとて、公け事のひまゝに営みたてつる、帝国婦人協会と云ふものゝ集まりに、加はらんとある人、さては、尚さらぬも、そのかし聞えばやなど、(以下、省略)

と記している。旅はその地に女子教育を定着させるためであり、多くの友人の助けを得ての旅であつたと下田は記している。さらに帝国婦人協会の集まりへの勧誘も目的にしていたらしい。同じく文末にも

此度の行は、たゞ信濃越後路なる遠きうから、知人がり尋ねて、山水の辺りに、しばし浮世の夏を忘れんと云ひつれど、したにはわが会のため、且は我が同胞姉妹の勤め怠るさまを見んと志しつるなれば、(九月七日)

とある。口では、信濃越後路の友人に対して避暑のために来たと言つたが、実のところ、会の発展のため、友人たちの努力する様子を確認するためであつたとユーモラスに記している。また「信越紀行後記」にも「明治三十三年の夏、北越、新潟の支会を巡視せんとて、みやこを立ち出でけるを」と記している。

この旅で、下田歌子は帝国婦人協会設立の意義と女子教育の重要性を説くべく遊説を行い、あわせてそのための視察を行つてゐる。下田の蒔いた種は、その考えに共感した支援者たちによつて、早々に北越支会と新潟支会の結成という形で実を結び、その後、それぞれの関連学校の創設(北越女学校、新潟女子工芸学校)へと発展する。

旅の成果は大きかつたが、その旅を記した著作も、遊説と視察の行程を詳細に記録して、当時の長野地方、また新潟地方の

状況を窺い知るための貴重な資料ともなつてゐる。

このような資料的な価値も高い作品であり、今後そうした見地から論者も考察を深めたく思つてゐる。その一方で、旅の折々の下田の個人的な心情が記されていることも見逃してはならないであろう。[※]後述するように、下田は旅の行程の中で、祖父東條琴臺の旧跡を訪ねている。下田が新越地方に関心を抱き、その地での教育活動を行つたのも、そのような父祖意識からと押さえることも可能である。本稿は、下田が父祖に関わる神社に言及したこと、また祖父の旧跡を訪ねた記述にも触れ、さらに付編として二十二年後に祖父の石碑が建立された状況も諸資料から明らかにしたい。

二 『信越紀行』の成立

まず、『信越紀行』の成立について確認したい。『信越紀行』は、以下の三段階にわたり公刊されている。

1 第一次 「日本婦人」(帝国婦人協会 発行)

明治三十二年十一月(一号)	31—34頁
明治三十二年十二月(二号)	56—62頁
明治三十三年 一月(三号)	69—75頁
明治三十三年 二月(四号)	62—66頁
明治三十三年 三月(五号)	80—81頁
明治三十三年 四月(六号)	83—87頁

明治三十三年 五月(七号) 85—88頁

明治三十三年 六月(八号) 75—80頁

明治三十三年 七月(九号) 81—85頁

明治三十三年 八月(十号) 86—89頁

○「信越紀行後記」(原題「越路のつと」)

明治三十三年 九月(十一号) 80—83頁

2 第二次 『信越紀行』・「信越紀行附録」

明治三十三年十月(帝国婦人協会 刊行)

3 第三次 『信越紀行』・「信越紀行後記」

「香雪叢書第一卷 紀行隨筆『よもぎむぐら』」所収

昭和七年十一月(実践女学校出版部 刊行)

繰り返すが、『信越紀行』が記すのは、明治三十二(一八九九)年四月の帝国婦人協会私立実践女学校および女子工芸学校創設から三か月ほどを経た、初めての夏期休暇を利用しての旅であった。その旅が終了するやいなや、その後、時を置かずに「日本婦人」一号に掲載が開始され、以降明治三十三(一九〇〇)年八月の十号まで連載、十一号には「信越紀行後記」を載せている。さらに、その翌月には『信越紀行』としてこの旅日記を単行本に纏めて、帝国婦人協会から刊行するに至っている。現在の眼で見ても、この刊行の速さは瞠目されるが、おそらくは、この旅で視察した信越地方の女子の生活と教育の現状報告と下田の考えを、いち早く全国の読者に伝える目的での連載であったと言って良いであろう。

う。この雑誌「日本婦人」創刊を知らせるとともに、一部を謹呈する旨の福澤諭吉子息・福澤捨次郎宛、下田歌子差出の書簡は、当時の下田の高揚した気持ちを今に伝えてもいる。⁵²⁾

下田歌子は、明治天皇第六皇女常宮昌子内親王(後の竹田宮妃)と第七皇女周宮房子内親王(後の北白川宮妃)の御教育掛の内命を受け、明治二十六(一八九三)年九月から明治二十八(一八九五)八月までの約二年間、西欧諸国の女子教育の状況を視察した。当初の皇女教育のための視察という目的に反して、下田はこの欧米視察を通して、国家興隆の基礎は女子教育にあると考え、中流や一般庶民の女子教育の確立の重要性を自認するに至っている。そのことを実行に移したのが、帝国婦人協会の設立であり、以下の五部門に及ぶ壮大な構想でもあった。

- 一 教育門 女子教育研究会 実践女学校 付属慈善女学校 女子工芸学校 付属下婢養成所 女子商業学校
- 二 文学門 女子文学研究会 女子文学出版所
- 三 工芸門 女子工芸研究会 女工養成所
- 四 商業門 女子商業研究会 勸工場
- 五 救恤門 女子救助会 慈善女子病院 看護婦養成所

これらの構想の実現のためには、現状把握は必須であり、この旅の後、下田は全国への視察と遊説へと活躍の場を広げ、またその行程は海外にまで及んでいくことになるが、その第一歩として

『信越紀行』の旅を位置づけることも出来得るのである。

さて、『信越紀行』における下田歌子の講演内容と視察を以下のように表にしてみた。

『信越紀行』からは、講演なのか視察なのか判然としない部分もあるが、ほとんどの箇所で見察も兼ねて講演を行っていたのだと判断される。

日付	講演内容(視察)	会場(所在地)	備考
8月11日	帝国婦人協会のことについて	尋常中学校(上田)	信濃教育会支部の依頼
8月11日	女子教育と帝国婦人協会について	明倫堂(上田)	婦人談話会、婦人会の依頼
8月12日	帝国婦人協会のことについて	(善光寺)	岡本氏(華族女学校勤務)・山口造酒教授兄の依頼
8月13日	帝国婦人協会と女子教育について	(善光寺)	
8月13日	看護婦の心得について	(善光寺)	赤十字社支部(田中主事の迎えがある)
8月13日	女子教育と帝国婦人協会の主旨について	城山館(長野)	当地の婦人達(志深き男子も混じる)
8月13日	帝国婦人協会について、女服改良の説など		小坂氏の招きで夕食
8月14日	女子の技芸について	女子裁縫講習所	夜、城山館主宮下氏らと茶話会
8月15日	女子服装について	尋常中学校(上田)	当地の婦人達(志深き男子も混じる)

日付	講演内容(視察)	会場(所在地)	備考
8月15日	女子教育社会改良について	(上田)	小島大次(治)郎氏の招きで人々と談話
8月16日	女子服装について 社会改良のこと	小島大次(治)郎氏宅(上田)	青年同志倶楽部の少年たち
8月16日	帝国婦人協会と女子教育について	学校 (詳細不明、小諸)	光嶽寺の離れ家で臥す
8月17日	女子教育について	(屋代)	同行二宮(孝順)氏の招きか? 米人ベッドレ、ヒルトン氏(詳細不明)と語る
8月17日	帝国婦人協会と女子の心得について	八幡高等尋常小学校(八幡村)	和田郡平氏の招き
8月18日	帝国婦人協会の主旨と女子教育について 佐久間象山の志について	松代学校(松代)	北澤正誠夫妻出迎え
8月19日	六工社の製糸見学		長野市の県立高等女学校長 渡辺(敏)氏の紹介で河原操子と会う(午後)
8月20日	製糸工場見学	(須坂)	小田切(辰之助)氏・越(寿三郎)氏、牧(新七)氏などの工場
8月20日	女教師の心得について	夏期講習会 (須坂小学校)	
8月20日		勝禪寺	須坂婦人会
8月20日	多くの工場見学		寄宿舎や食堂、浴室など
8月20日	工女の心得	勝禪寺	小田切氏宅で夕食 聴衆は三千人近い

日付	講演内容(視察)	会場(所在地)	備考
8月20日	工女の待遇について		その局にあたる人々に対して考えを語る
8月21日	帝国婦人協会と女子のため婦人の心得について	城山館(長野)	西澤(三蔵)氏の勧め
8月22日	女子の心得について	本誓寺(高田) (第二尋常師範学校の仮舎あり)	高橋文質氏ほか多くの婦人の出迎え、増村廣次氏夫妻と談話
8月23日	工女の心得について	羽二重織場(高田)	大野(正)氏の織場
8月23日	女子教育と帝国婦人協会について	本誓寺(高田)	
8月23日	婦人の心得と帝国婦人協会について	本誓寺(高田)	協会の細目等を説く。慈善女学校への寄付の申し出がある(糸魚川小学校女教師・大森光氏)
8月24日	女子の身分及び帝国婦人協会の主旨について	真行寺(直江津)	
8月24日	貴族の女子教育について	帝国婦人協会賛助会員(直江津)	
8月26日	母親の責任について	興国寺仏教婦人会(直江津)	婦人会長より会へ寄付金がある
8月28日	女子達のための道について	尋常師範学校(新潟)	
8月29日	女子の家庭に対する心得	行形亭(新潟)	
8月29日	帝国婦人協会の会旨についてと女子教育について	尋常師範学校(新潟)	市内の有志家たち
8月30日	婦人の心得について	長徳寺(新発田)	勝間田知事夫人(千代子)来訪、中野悦子氏同行

日付	講演内容(視察)	会場(所在地)	備考
8月31日	婦人の心得について	偕行社(新発田)	将校婦人会
9月1日	婦人の心得について教育のことについて	小学校(蓮野村)	二宮孝順氏の招き
9月3日	帝国婦人協会のことについて	東別院(三条)	聴衆は四千人以上か
9月4日	女子の心得について	妙行寺(柏崎)	

前述したように、『信越紀行』には、今後女子教育を発展させる宣言とも受け取れる記述がある。その旅の目的のとおりに、下田歌子は、帝国婦人協会の主旨説明とこれからの女子教育に熱弁を奮っている。これらの講演の内容の多くが、後に著作物として公刊され、随時世に問われていくことを思えば、早い段階で下田の中には、すでに一定以上の纏まった考えがあったというべきであろう。やがて、下田は清国への女子教員の派遣にも力を入れていくことになるのだが、清国における初めての日本人女性教員として知られる河原操子(一八七五―一九四五)との出会いもこの旅であつたことも特筆すべきであろう。

三 父祖への想い

『信越紀行』には、信越方面への旅に先立ち「先、玉篋二荒の山の飯宮に渡らせおはします、姫宮たちの御気色伺い奉りて、」との一文があり、「両姫宮殿下の御前に伺候す。」ことから、両姫宮へ

の挨拶を済ませての出発であったことが示されている。

いと嗚呼がましようさかしらに、さし過ぎたらんやうの誹りはさるものにて、才短く徳薄き身には、なかなか恥かぢやかしう、力にあまる重荷負ひて、遙けき道に出でたゝんこと、空恐しきまで覚ゆれど、畏き大御恵の露に湿ふ身の、かゝる大御代に生れあひたらんかひには、せめては、心の及ばん極み、身のつゞかんかぎり、尽しまつらでやはと、思ふことの片端語りいでたるに、(以下、略)

という記述から、この旅に対する並々ならぬ決意が表明されているよう。

そのような決意の旅は、折から鉄道が敷かれ、人々の往来がおよそ可能になつた地方を中心に出かけている。しかし、その道中には下田に繋がる人々の所縁の地が存在し、関係諸氏との交流もまた描かれてもいる。『信越紀行』は、下田自身の父祖意識が表出され、それを確認する旅でもあつた。

まず以下の箇所、遠祖にあたる平尾神社をめぐる記述があり、注目される。

七月十一日 軽井沢く塩尻(車窓)

この国の北佐久郡なる平尾山は、我が遠祖平尾伯耆が城跡なりとぞ。是はかねて、亡父が家の旧記に載せたる所なる

が、いまはいかになりけん。時もあらば尋ねて見よ。といひ遣し給ひしかば、此度は必ずと思ひつれど、たゞ城の跡のみして、余は何もなく、早くの事をつばらに知るよしもなし、と聞くに、あへ無くて徒らにすぎゆく。とばかりありて、牧野子爵が旧城の跡、布引山などを望み、筑摩川を目の下に見つゞぞゆく。

其かみの栄もなれば知るらんをむかしかたらへ峯の松風
下田女史が祖先の旧城趾をのぞみてよめる。 荻江子

遠つおやのしめし大城の跡とへば峯にこ高き松の一村

下田歌子は、嘉永七・安政元(一八五四)年、美濃国岩村藩士の平尾録蔵の長女として生まれている。上記の『信越紀行』七月十一日の条には、その平尾家のルーツが長野県北佐久郡平根村平尾(佐久市)にあることが家の旧記にあり、父からは、機会があれば現状がどうなつていくか訪ねてみよと言われていたことを記している。今回は必ずと思うものの城の跡のみで、古い時代の詳しいことを知る由もないとして車窓から遠望し、帝国婦人協会理事の松本荻江子と歌を詠むにとどめている。一見すると、現地を直接訪れていないことから、寄せた関心も少ないかに見えるが、わざわざ書き留めていることは、相応の関心があり、それが公開されていることは自己の出自を知らしめたいという思いがあつたことに相違ないだろう。

下田がやはりこの地に関心を持っていたことは、その後大正

九（一九二〇）年四月二十五日、昭和九（一九三四）年春の二度にわたり、信州佐久郡平根村平尾（佐久市）平尾山守芳院（五代平尾守芳建立）に参拝していることからわかる。自撰歌集『雪の下草』（「香雪叢書第二卷」昭和七・一九三二年）には、最初の訪問の際に詠んだ歌を載せている。

四月の末つ方遠祖の尊墓にものしけるに軽井沢の

辺の躑躅紫色なるのみが見えければ

春の日にもゆとも見えぬいはつゝじ色のゆかりは深きものから

浅間山のそがひの村は春ともおぼえず風いと寒し

この里は浅間がたけの近ければ春なほとほきこゝちこそすれ

同じをりに

遠つ祖のみあととふとて一年にふたゝび見つる花ざかりかな

梅桜えだをまじへてひと時のさかりを見する春のやまざと

四首の短歌が詠まれるなど、そこに父祖ゆかりの地への並々ならぬ思いが表出している。その約二十年前の紀行文『信越紀行』で下田は女子教育への熱い情念のみを語るが、新越地方への旅の幾許かは、こうした父祖ゆかりの地への思いに支えられている部分もあつたのではなからうか。

四 祖父琴臺への思い

続いて、祖父・東條琴臺をめぐる記述を検討したい（以下、「東條琴臺」は旧字表記とするが、引用については原文ママとし、新字表記も混在する）。

以下にあげた箇所はいずれも、この『信越紀行』の旅の途中において、祖父・東條琴臺の所縁の土地を訪ねたエピソードである。下田歌子の生家である平尾家は、岩村藩松平氏に仕えた。国もとでは、曾祖父の歙藏信従以来、学問に優れた家柄として知られていたが、歙藏には跡取りとなる男子がなかつたために、文化十四（一八一七）年、太田錦城の周旋により、三女貞の婿として迎えたのが東條琴臺であつた。翌年、琴臺と貞との間に生まれたのが下田の父・録藏信亨である。東條琴臺は、藩内の学派の対立から岩村を出て、江戸で多くの著述を出版し、進歩的な儒学者として世に知られることになった。朱子学者（岩村藩家老の家に生まれた佐藤一斎に師事）・洋学者の佐久間象山とも親交が深い。しかしながら、海防論を説いた著作『伊豆七島図考』が幕府の咎めを受け、越後高田藩にお預けの身となり、やがて明治の維新を迎えるまで越後国高田（現在の新潟県上越市）で暮らし、藩士の教育にあつていった。

この旅の途中で、下田は佐久間象山と縁がある、横田亀代子のもとを訪ねている。ここでは、横田亀代子刀自の話に興味深く聞き入り、佐久間象山の姉北山刀自の話に「女子のため」に頼もし

いと感じている。横田家は信濃松代藩士一五〇石の家柄であった。亀代子は、明治二十一（一八八八）年に会員三十六名で松代婦人協会を発足し、その会頭を務めた。発足会では、津田仙（梅子父、東京婦人矯風会幹事）が講演を行っている。亀代子の父・横田甚五郎衛門機応と竹内八五郎が佐久間象山を通じて千曲川通船問題を通路 聖 謨に談判（嘉永六・一八五三年）したこともあった。

① 八月十八日 屋代八幡宮

此の家あるじに、

こゝに来て見ればゆかりの藤袴うらなつかしき宿の中垣いにし年、わが祖父の来たり遊ばれつるよしにて、書き残されたるものどもを見れば、そぞろに懐旧の情に堪へず。

② 八月十八日 松代

正午十二時ばかり松代に達す。（中略）人々の案内に従ひて、松代学校にわが会の主旨及び女子教育の事、佐久間象山大人が志などに就きて語る。（中略）かの佐久間大人が姉北山の刀自が、世に傑れたる事蹟を聞くも、女子の為いと頼もしい覚ゆかし。

横田亀代子老刀自が、そのかみの事ども、くづし出でつゝ語らるゝいと面白し。殊に佐久間象山大人が履歴に就きては、或は悲しく、或は打ちも笑まれ、眉も打ちひそまれ、涙もこぼるゝことこそおほけれ。刀自が亡父なる、横田機応いふ人の、佐久間大人が蟄居を訪らはれたるふみの返事に、大人

が、

中々につけぬればこそてる月の光みちぬる夜半もありけれ

と読みて遣されけるとぞ。いとみじうもあるかな。（以下、略）

③ 八月二十二日 吉田停車場

長野の次なるよし田の停車場よりは、右に須坂を望み、左に東条を見る。東条は吾が祖父が祖の故郷なるよし、かねて聞き置つることもあれば、何と無く懐しき心地す。長野を出でたつ程、

浅からぬ人のまことの嬉しさに長野の里になが居してけり

④ 八月二十二日 高田

高田町は嘗て榊原子爵が当地を領せられし頃、わが祖父東條琴臺が小笠原島開墾のことにつきて、徳川幕府に建白せし事により、幕府の嫌忌に触れて、江戸お構と成りぬるを、榊原候の内々に請ひ申さるゝよしありて、侍講として伴はれける儘に、祖父がこゝに留まること殆ど二十年が程に成りぬとぞ。其の程この国の人々の厚く待ち深く慕はれけるさまは、かねて伝へ聞き置きつることなれば、始めてあひ見る人も、何となく旧き友どちに逢ふ心地して、いと睦まじう覚ゆるもあはれなるわぎなりかし。

⑤ 八月二十三日 高田

我が祖父東條琴臺が旧宅の、今は遠山某氏が住家となれるを訪らふ。庭の松梅も刈り繕ふ人もなくて、心の儘に茂りたる、朽ち残る軒の忍草も、懐かしうおぼえて、すゞろに涙ぐましく成りぬ。

庭の面の老木の梅の人ならばむかしの春もとはましものを其より、榊神社へ詣で、(以下、略)

①は、祖父東條琴臺と親交があつた八幡宮神官松田氏のもとを訪ねたところ、その書跡を見て、懐かしく思つたこと。③は、吉田の停車場から見える東条は、琴臺の故郷であり、かねてから話を聞いていたこともあり、懐かしく、長野の人々の深い親切に長居をしたこと(東條家に伝わる系図では、同家の遠祖は清和源氏武田氏支流甲斐一条氏で、一条時信の子武川太郎義行が甲斐国東条に土着し、東條次郎義信を名乗つたのが始まりとしている)。④の高田は、琴臺が二十年の間、榊原候の侍講として仕え、長く過ごした土地であつた。高田の人々との親交はかねてから聞き及んでゐるため、旧友に会う心地がして親密でしみじみとした感じがしたこと。⑤では琴臺の旧宅を訪ね、経年し荒れたままの庭に立ち、祖父が生活した頃に思いを馳せ、懐かしさに涙ぐんでいる。そして、『古今和歌集』「住吉の岸の姫松 人ならばいく世か経しと言はましものを」(巻第十七・雑歌上906 読人しらす)を本歌に、「庭の面の老木の梅の人ならばむかしの春もとはましものを」の一首を詠んでいる。

以上のように、『信越紀行』には、下田の誇るべき祖父であつた東條琴臺のことやゆかりの地、東条が繰り返し登場しており、この旅が祖父のゆかりの地を訪ねる旅でもあつたことを示している。下田はここでも直接述べることはないが、新越地方で畢生のテーマである女子教育を推進していくことに運命的なものを感じていたことであろう。そしてこの琴臺をめぐる言説は、かの地でこの大業をなすにふさわしい、おのれの姿を屹立させ喧伝することに繋がっていたのではあるまいか。

なお、『信越紀行』に記された、新越地方での遊説活動、教育(活動の実態については稿をあらためて考究したい)。

付 東條琴臺石碑建立考

以下、付編として、祖父東條琴臺の石碑が建立された経緯について詳らかにしたい。

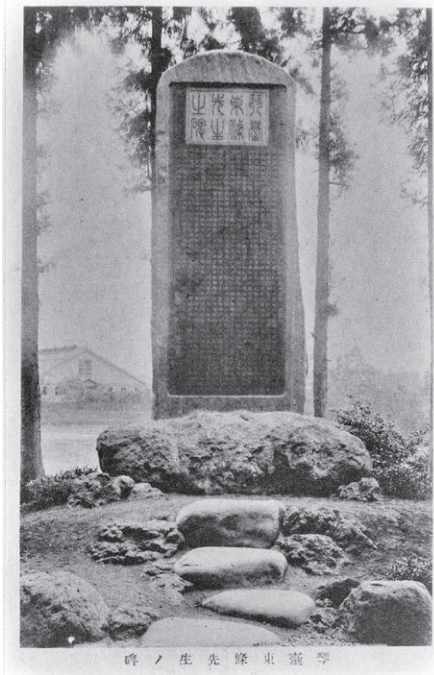
前述したように、嘉永三(一八五〇)年、下田の祖父・東條琴臺は、越後高田藩預かりの身となり、明治元(一八六八)年政府からの召命が下りるまでの、およそ二十年間を榊原候に仕えた。慶應二(一八六六)年、藩校修道館が開館すると、その教官筆頭に就任している。

以前、拙稿「下田歌子の教育の源泉」(『女性と文化』3、二〇一七)において、越後高田藩「琴臺東條先生之碑」には、西園寺公望篆額、森林太郎碑文が書かれており、鷗外自筆「榊原政岑事蹟」

「古今資料 高尾考」（東京大学「鷗外文庫」）も残されることから、森鷗外の高尾神原事件^注への関心を述べた。また、森鷗外『青年』（明治四十三・一九一〇年）に登場する高島詠子は、下田歌子がモデルに披瀝されることは、広く知られている。すでに小林修によつて、下田の祖父東條琴臺の碑の撰文を鷗外が行つてゐること、明治三十七・一九〇四年十月二十四日の妻しげ宛の書簡にも下田の名が見られることについては指摘がある。小林の指摘は先駆的であるが、立命館の創始者で当時の名士である西園寺公望揮毫と森林太郎（鷗外）の碑文による石碑が建立されるに至つたことは、当時多くの耳目を集めたものであり、本稿は別の視点も含めて論及してみたい。下田歌子の父祖意識が、否が応にも高まつた出来事として、あらためて考究の必要があるだろう。

この「琴臺東條先生之碑」

【図1-1】には、七百四十六字十六行からなる漢文の碑文が記されている【図1-2】。翻字は『鷗外全集 第三十八巻』「雜纂」（昭和五十・一九七五、岩波書店）に拠つた。なお、私に一部あらため、改行して、傍線を付した。また、旧字体は新字体にあらためた。



【図1-1】東條先生建碑除幕記念「琴臺東條先生ノ碑」

【図1-2】琴臺東條先生之碑

琴臺東條先生碑記 正二位大勲位公爵西園寺公望篆額

越後高田故榊原侯采地。而琴臺東條君久居于此。頃日君之門人清水氏廣博。作君伝者西尾氏豊作等。立石於城門外。屬予為記。

文化庚午政令始襲封也。銳意釐革藩政。每憾少能任事者。文政丁亥得君於江戸邸。校寬永系譜。既而相知漸熟。稍稍問以藩事得失。未幾致仕。子政養承。

弘化丙午政養卒。其弟政愛嗣。而藩之重事。尚決於政令。丁未君遂委質。將見魚水之歡。先是君著伊豆七島凶攷。以議刃防事聞。

嘉永庚戌幕府遽令政愛囚君於邸。翌年加恤釋囚。實於高田。君乃閉戸述作。若忘身之貶謫窮僻者。

居十年。文久辛酉政令政愛皆卒。政敬嗣。政敬者政令之孫。而今之榊原原子也。

當此時天下多事。処士橫議。刑戮相望於道。而幕府莫之能制。藩人懼政敬年少或誤事。欲選通時務者。以衛翼之。於是起君使四方。辛酉之信濃。壬戌之越中。丁卯之陸奥。以審列藩情勢。

癸亥將軍家茂入觀。政敬為輔行。乃請以君隨。不聽。

明治戊辰藩興修道館。使君督學。君自就藩十七年乎此。其志若將行者。而事既晚矣。

先是丁卯 先帝即位。幕末歸政 天子。

至戊辰鎮將府徵君於東京。

己巳君遂去藩。藩人莫不惜之。

君名信耕。字子臧。先世自甲斐徒信濃東條邨。

祖通庵。父默齋並從伊藤東涯游。居江戸以方技餬口。家藏東涯所書琴臺二字匾。伝至于君。以自號。

君生寬政乙卯六月七日。長受業太田錦城。会美濃巖邨藩文學平尾他山無子。為其季女擇壻。錦城薦君。文化丁丑君二十三。出冒平尾氏。二歲有故訣別。復本姓。

文政中為幕府納戸吏。丁亥罷。受榊原氏聘。時年三十三。及晚徵入京。授宣教少博士。廢官後更授權中講義為龜戸菅廟祝。未幾轉教部省十等出仕。掌考証事。

乙亥以目疾乞骸骨。尋失明。

戊寅九月二十六日病歿。享年八十四。

君狀貌奇偉。長身楮面。耳朵垂寸余。為人宏達。明大体。不與人爭能。平生著述太富。而先哲叢談後編統編尤為可伝。其曰後統者。以曩時幕府士原念齋撰前編也。

君冒平尾氏時。生子信亨。信亨女歌子適下田氏。以文學才幹名。君復姓。又娶生信升。信升生甲子三。甲子三無子。養岡本氏子仁一継家。

大正九年庚申九月

正三位勲一等功三級医学博士文学博士 森林太郎撰

右には、碑文がどのようないきさつで書かれることになったの

か、榎原家預かりになつた経緯と高田藩での業績、平尾家との縁、また長身で耳朶が垂れていたことなど琴臺の人となりとその容貌までが詳細に記されていて興味深い。琴臺が東京に去る際には、「己巳君遂去藩。藩人莫不惜之。」(傍線部)と敬愛されていた様子が記されている。

『琴臺先生建碑報告書』には、以下のようにある(一部抜粋)。^{注13}

一、発起年月 大正八年九月

一、発起者(及委員)氏名

門人 清水廣博

東條琴臺編集者 西尾豊作

一、建碑場所 高田市岡島町東南隅

旧城外濠ノ曲ニシテ榎神社ノ東門ニ面ス周囲ハ杉樹矗立

シ水上遙ニ東南ノ諸山ヲ望ミ絶好ノ地位ヲ占メタリ

一、挙式年月日 大正十年五月廿二日

当日午前十時式ヲ行ヒ故先生ノ外孫下田歌子氏来場除幕

セラル(中略)式後岡島町小学校内ニ於テ午餐を饗シ遺

墨ノ展観ヲナセリ

一、収支清算

収入之部 総額 金二千二百六十二円四十二錢也(の内)、

寄付金 金三百円也 東京 下田歌子君

支出之部 総額 金二千二百六十二円四十二錢也(の内)、

金二百円也 碑文二切揮毫共

この石碑は、琴臺の門人の清水廣博と『東條琴台』(東京堂書店、大正七・一九一八)の著者・西尾豊作が発起者となつて建立されていたことが示されている。下田歌子は、石碑の維持と碑域の修繕掃除等の目的を指定した上で「金三百円」を寄付している(「附記」には、「石碑維持金三百円ハ下田歌子氏指定寄附金ヲ以テ之ニ充テタルモノニシテ銀行預金トシ年々利子ヲ以テ碑域ノ修繕掃除等ノ費ヲ弁ジ其剩余ハ預金トシテ積ミ立ツルモノトス」とある)。各新聞もこぞつてこの慶事を記事にして広く伝えている。^{注14}

(一) 大正十(一九二二)年五月十六日新潟毎日新聞(朝刊)

「下田女史講演」

(前略)二十二日故東條琴臺方の建碑除幕式に臨席し次で高等女学校の講演会に臨み即日帰京せりと

(二) 大正十(一九二二)年五月十七日朝日新聞(朝刊)

「琴臺の記念碑」

(前略)二十二日琴臺の孫女下田歌子女史に依つて除幕式を挙行する由、同碑象額は西園寺公撰文は森林太郎博士の手に成つた。

(三) 大正十(一九二二)年五月十八日高田日報

「琴臺翁の記念碑なる下田女史来り除幕をなす」

(前略)象額は西園寺公爵で撰文は森林太郎博士である

(中略) 琴臺の孫女は愛国婦人会長下田歌子女史である当日の除幕式に幕を除かるゝは実には下田女史である尚ほ下田女史は二十一日直江津町にて二十二日には高田市にて婦人の為め講演をする筈

(四) 大正十(一九二二)年五月十八日高田新聞

「隠れたる開国主唱者琴臺の記念碑成る 下田女史除幕高田直江津に講演」

(前略) 篆額は西園寺公爵で撰文は森林太郎博士である(中略) 琴臺の孫女は愛国婦人会長下田歌子女史である当日の除幕式に幕を除かるゝは実には下田女史である尚ほ下田女史は二十一日直江津町に、二十二日高田市に婦人の為めの講演をされる筈

(五) 大正十(一九二二)年五月二十二日読売新聞(朝刊)

「下田歌子女史の除幕で 東條琴臺翁の建碑式 廿二日越後高田の旧城趾にて」

(前略) 同碑の篆額は西園寺公撰文は森林太郎博士で除幕式当日幕綱を引くのは誰であろう翁の孫に当る下田女史であります。

(六) 大正十(一九二二)年五月二十三日高田日報

「千哲琴臺の遺徳茲に挙る 令孫下田女史が除幕 昨日碑前

の盛儀」

(前略) 縮緬の黒紋服を着けて下田歌子女史の手に依つて巖に幕は除かれた(中略) 篆額は西園寺公撰文は森林太郎博士の手に成りしもの(中略) 本日茲に祖父琴臺の記念碑除幕式を行はるゝに際し私もお招きに預りまして誠に感謝に堪えざる処であります定めし地下の祖父も感涙を流して居るでせうし私達子孫としても甚だ光榮とする処であります

(七) 大正十(一九二二)年五月二十三日高田新聞

「風薫る榊神社の前に 琴臺翁の石碑除幕 下田歌子女史の手に幕は切落さる 感想談や遺墨展覧会やに昔を偲ぶ」

(前略) 皇后陛下より御表向きではないが下賜された御菓子其他の供物を碑前に捧げ終れば翁の孫下田歌子女史に依つて幕を張つた糸は切られた、篆額は西園寺公撰文は森林太郎博士筆は中根半湖氏(中略) 十三時過散会、下田女史は直ちに瀬尾邸に少憩□女学校の講演会に臨まれた

(一) (四)は、除幕式以前、(五) (七)は、除幕式後の新聞記事であるが、全ての記事には、

・篆額を西園寺公、撰文を森林太郎(鷗外)博士によるものであること

・除幕式で幕を切つたのは、東條琴臺の孫である下田歌子女史であること

が記されている。また、この機会に「婦人のための講演」「女学校のための講演会」が開かれていることもあわせて記事としている。(六)には、下田の挨拶を記録し、(七)には皇后から非公式に御菓子他の供物も下賜されていたことが確認される。

これらの新聞記事からは、東條琴臺の遺徳を顕彰する石碑であるものの、孫の下田歌子とともに紹介されている印象が強く、この建立が下田の名声と不可分であったことがわかる。『信越紀行』の明治三十二(一八九九)年から二十二年後であり、東條琴臺のゆかりの地を巡った記述がこのような晴れがましい形で結実したのである。

森鷗外の日記には、この石碑を建立し、その除幕式が行われた大正十(一九二一)年五月二十日から、二十日ほど経た後に、下田がお礼のために鷗外のもとを訪問したことが記されている。

○大正十・一九二一年 六月十一日

十一日。土。雨。参寮。下田歌子来謝予撰東條琴臺碑文。(「委蛇録」(大正十年辛酉日記)『鷗外全集 第三十五卷』^{註15})

さて、東條琴臺石碑の建立の経緯は、右に述べたようなことと思われるが、鷗外が碑文を書いたのはどのような事情があったのだろうか。また、西園寺公望はどういった成り行きで扁額の揮毫に至ったのであろうか。

西園寺公望は北越戊辰戦争で北国鎮撫使として高田に滞陣した

際に、琴臺と会っており(公望二十歳、琴臺七十五歳)^{註16}、後に下田歌子から篆額の揮毫を依頼された経緯がある。

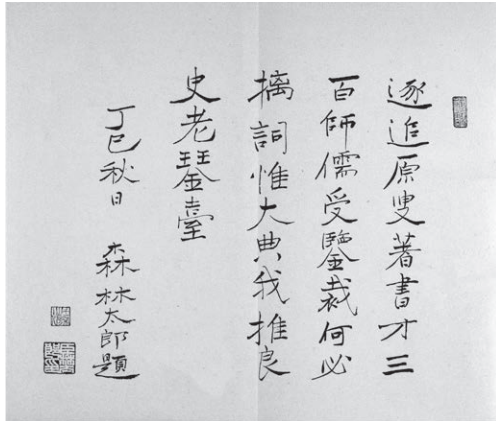
(前略)それから懇意になった。琴臺に先哲叢談続編の著述があつて、まだ版にせずにあつたのを借りて読んだ、ずつと後になつて、琴臺の碑を建てるといふので、わたしに篆額を頼みに来たものがある、其種の揮毫は大抵ことわるが、琴臺のならば書きませうと受合ひ、下田歌子が琴臺の孫だとかで、やがて札に来たことがある、と語られたのが、公が維新前已に二十一史を讀破して、余力を志那の近世史に及ぼしたことの証となる、

発起者の一人である西尾豊作の著書に『東條琴台』(前出)がある。西尾は、後年『下田歌子伝』を著してもいる(昭和十二・一九三七年・咬菜塾)。『東條琴台』の口絵に、「東條琴臺肖像」^{註2}とともに、森林太郎の七言絶句の題詩が記載されている^{註3}。^{註17}

【図2】『東條琴臺』口絵「東條琴臺肖像」



【図3】『東條琴臺』口絵「東條琴臺題詩」



遂追原叟著書才
三百師儒受鑒裁
何必摘詞惟大典
我推良史老琴臺
丁巳秋日 森林太郎題

この刊行を知らせる新聞記事には、下田歌子の祖父であることが記載されていることも見逃せないであろう。^{注18}

○大正七・一九一八年三月十一日朝日新聞(朝刊)「出版界」

『東條琴臺』(西尾豊著作)

△四六版紙装南京四一七頁

△金八十銭

△神田表神保町、東京堂

(前略) 実には下田歌子女史の祖父なり本書其の伝を詳にし終りに史論詩文経済等に関する一家の見を添へ作詩蔵書蹟等を附録としたり

ところで、石碑建立から遡ること大正五(一九一六)年の段階で、森鷗外は東條琴臺のことをよく知らないと言っている。

○森鷗外『寿阿弥の手紙』

大正五年五月二十一日〜六月二十四日

「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載(三十二回)、

のち『山房札記』に収録。

只最後に附記して置きたいのは、師岡未亡人石と東条琴臺の家との関係である。(中略) 浅井平八郎さんの話に拠るに、石は嘗て此縁故あるがために、東条氏の文書を託

せられてゐた。文書は石が東条氏(つぐな)の親戚たる下田歌子(か)に交付したさうである。

わたくしは琴台(マヤ)の事蹟を詳(つまひら)にしない。聞く所に拠れば、琴台は信濃の人で、名は耕、字は子蔵、小名は義蔵である。寛政七年六月七日芝宇田川町に生れ、明治十一年九月二十七日に八十四歳で歿した。

(『鷗外歴史文学集 第四卷』注19)

そこで、西尾豊作と鷗外の接点を、以下に求めたい。

鷗外は『伊澤蘭軒』を大正五・一九一六年六月二十五日〜大正六・一九一七年九月五日の間、「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載していた(三七一回)。

その二九一回で、

○「松田道夫の父は信濃国佐久郡岩村田の城主内藤豊後守正繩の医官で江戸定府となっていた。」

と書いた。が、続く三二二回に

○「美濃国恵那郡岩村の城主松平(大給)能登守乘濫」の誤
右西尾豊作君の教に従いて正す

と正誤を書き、さらに後の『鷗外全集』では、以下のように訂正されている。

○「松田道夫の父は美濃国恵那郡岩村の城主松平(大給)能登守乘濫の医官で、江戸定府になつてゐた。」

(『鷗外全集 第八卷』注21)

その後の鷗外の手紙には、おそらくこの石碑と思われる依頼への返事が見えている。

○和歌山県西牟婁郡町立田辺実業学校 西尾豊作宛 (端書)

大正九(一九二〇)年 三月九日

琴臺墓銘之件熟考可仕候ニ付暫時御待可被下候為換ハ御預リ申置候

三月九日 森林太郎

(『鷗外全集 第三十六卷』注22)

また別途、もう一人の石碑の発起者である清水廣博からも依頼されている。注23

清水廣博は、天保十三(一八四二)年、高田藩の中老役の家に生まれている。明治維新以来、参政、大参事となり「修道館」「新瀉学校高田分校」の管理に務めた。その後、高田図書館の初代館長を務め、大正十五(一九二六)年、八十五歳で没している。注24

大正九(一九二〇)年三月森鷗外が高田三十連隊へ兵士の健康を視察に行った時、元藩士の清水廣博に琴臺の碑文制作を依頼された。鷗外は自分の歴史小説の素材として琴臺の『先哲叢談 後編』『先哲叢談 続編』を利用していたのでこの申込みを承諾した。

後に鷗外は、この清水廣博のことを日記にも記している。

○大正九(一九二〇)年 三月十三日

土。晴。参寮。五味均平、清水廣博、弟潤三郎至。清水東條琴臺門人也。年七十九。

〔委蛇録〕(大正九年庚申日記)『鷗外全集 第三十五卷』^{注5}

以上、直接、東條琴臺と対面したことがあり、また親交があった西園寺公望は積極的に扁額の揮毫の依頼を受けたことがわかるが、鷗外の場合は、発起人の西尾豊作や清水廣博^{注6}からの依頼によつて、それまであまり知ることがなかった東條琴臺の碑文の作成にあつていたことが確認できる。ただし、先の鷗外の『寿阿弥の手紙』の一節にあつたように、師岡未亡人石が親戚であるがゆえに東條琴臺の文書を委託されていて、それが親戚(孫)の下田に譲られた経緯も記していた。洪江抽斎に演劇を開眼させたという寿阿弥が書いた手紙から、その背景を探る、鷗外の優れた歴史家としての資質も感じられる、史伝的な作品の中で、石は大きな役割を果たしているが、その親戚である東條琴臺をよく知らないとは言いつつ、鷗外が関心を寄せなかつたとは思われない。ここには「下田歌子さん」と、下田も登場しており、その後、碑文の制作を引き受ける契機になつていただろう。先述したように、鷗外には神原事件への関心もあり、依頼を引き受けるに十分な内的な要因があつたことが見えてくる。

『信越紀行』に記されていた父祖意識、祖父への思いが二十二年後に石碑という形となつて結実したとも言え、下田の感慨もひとしおであつたと推察されるのである。

注

1

柳田泉は、『香雪叢書第一巻』所収の『信越紀行』について、以下のよう述べて高く評価している。

「女史(下田歌子―稿者注)一代の著作集を『香雪叢書』といふ。(中略)然し源氏物語講義よりも吾等にはその第一巻の日記の方が面白い。そこには所々に彼女の社会的関心、労働女性への同情、労資問題の憂慮が見えてゐるからだ。」

〔随筆 明治文学 3 人物篇・叢話篇〕「女性作家七人語」(柳田泉『随筆明治文学』、春秋社、昭和十一・一九三六年)、『随筆明治文学』谷川恵一他校訂、東洋文庫、平成十七・二〇〇五年)。

2

下田歌子記念女性総合研究所・登録番号S7428
(下田歌子記念女性総合研究所「年報」第8号・新資料紹介、令和四・二〇二二年)。

3

幕末の漢学者松本万年の長女。武威秩父郡(埼玉県)出身。明治八(一八七五)年女子師範教授となり、秋田県女子師範学校教頭などを歴任した。下田歌子とともに帝国婦人協会の設立や実践女学校の創立に尽力した。『太陽』「家庭叢談」(第五巻第二十二号・明治三十二年十月五日)には、下田の「松本荻江女史逝く」が掲載された。また、十三回忌に頒布された『松本荻江刀自遺稿 荻乃枯葉』(私家版、明治四十四・一九一一年)には、下田が記した詳細な伝記「はしがき」(明治四十四年九月初旬)が載り、下田と同行した信越紀行の際に詠んだ三首を収載する。なお、『信越紀行』は荻江(子)詠四首を載せるが、そのうち二首が共通し、他の二首は未収載である。一八五一―一八九九。

4

榊澤龍吉『郷土を拓いた戦国武将 平尾守芳とその一統』(樺、昭和六十二・一九八七年)。

5 下田歌子は、明治二十六（一八九三年）九月十日から約二年間渡航

するが、その際に同行した堀江義子編の『修身絵とき』『孝之巻』下田歌子関（春陽堂・明治二十七年）には、「廿七）琴臺、兒孫を戒む。」として東條琴臺が幼少時の下田歌子に「節儉とは、人に恵むべき物を惜むいひにはあらずして冗費を省くにあり」と説く、『徒然草』で有名な松下禅尼の教えにも似るとする逸話を載せている。

6 「中々に」の歌は『松代青年会雑誌』（62、明治三十五・一九〇二年附録）所収、（上條宏之『富岡日記の誕生―富岡製糸場と松代工女民衆史再耕』龍鳳書房、令和三・二〇二一年）。

7 西尾豊作『東條琴台』（東京堂書店、大正七・一九一八年）。岩村歴史資料館蔵、巖邑小学校旧蔵（大正八年、第一七〇九号）。

8 新編日本古典文学全集Ⅱ『古今和歌集』（小学館、平成六・一九九四年）。寛保元・一七四一年、播磨姫路藩十五万石第三代藩主・榊原

岑（一七三二―一七四三）が身請けした高尾太夫（江戸時代、新吉原の三浦屋に抱えられた遊女の代表的な源氏名。ここは、榊原高尾、越後高尾を指す）を、国もとの姫路城内に住まわせた。この一件は、徳川吉宗の質素儉約を旨とする「享保の改革」に触れ、榊原家は要地である姫路から、懲罰転封先として知られた越後高田へ転封を命じられた事件。高尾太夫は隠居した政岑に伴われ、高田城内に住んだが、政岑の死後は上野池の端の榊原家下屋敷に住んだ。剃髪して連昌院と号した。

10 神木まなみ「森鷗外「青年」に描かれる高畠詠子について―下田歌子『良妻と賢母』『婦人常識訓』との比較から見えるもの―」（実践女子大学人間社会学部紀要14、平成三三・二〇一八年）ほか。

11 小林修「東條琴臺・下田歌子と森鷗外」（『りんどう』38、実践国文科会、平成二五・二〇一三年）。

12 実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館蔵 下田資料
出納番号2954。他に、拓本（書幅）が、下田資料・出納番号5

210にある。なお、森鷗外寄贈「琴台東條先生之碑」拓本が、東京国立博物館に所蔵されている（森林太郎撰、中根半湖書、西園寺公望篆題、大正九・一九二〇年、B12031）。中根半湖は、名を興。祖父・半仙、父・半嶺の三代続く書家。父・半嶺に書を、漢字

を島田篁村に、漢詩を大沼枕山に学び、隸書や楷書を得意とした。

13 実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館蔵 下田資料
出納番号2954。

14 (一)〜(七)の引用は、旧字体を新字体にあらためた。

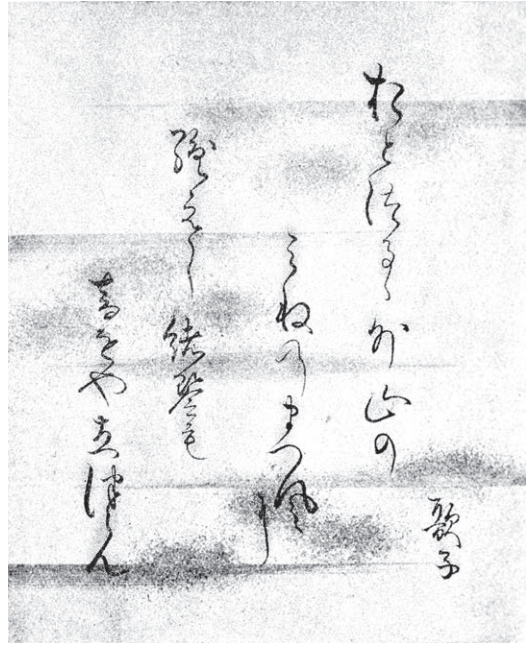
15 岩波書店、昭和五十・一九七五。なお、以下『鷗外全集』の引用は、旧字体を新字体にあらためた。

16 『隨筆西園寺公』（小泉三申全集第三卷、岩波書店、昭和十四・一九三九年）。

17 注7に同じ。

口絵には、下田歌子の自筆色紙和歌「おとつる、外山のミネのまつ風に 絶えし緒琴も 音をや立つらん 歌子」も掲載されている〔図4〕。

【図4】「東條琴臺」口絵「下田歌子 おとつるゝ 短歌」



18 引用は、旧字体を新字体にあらためた。

19 岩波書店、平成十三・二〇〇一年。

20 村山和夫著・石塚正英編『頸城野近代の思想家往還』（社会評論社、平成二十九・二〇一七年）。

21 鷗外全集刊行会、大正十二・一九二三年。

22 岩波書店、昭和五十・一九七五年。

23 内山知也「先儒祭奠前講話 東條琴臺の生涯と『先哲叢談後編』『先哲叢談続編』の成立について」（『斯文』118、平成二十一・二〇〇九年）。

24 注20に同じ。

26 25

注15に同じ。

清水廣博が記した「下田女史か平尾家祖先の御はなし筆記」は、「琴臺東條先生之碑」建立に際し、平板印刷して配布されたと思われる。また、清水廣博の「琴臺東條先生建碑除幕式式辞」が遺されている。以下に翻字してそれを示す。なお、旧字体は新字体にあらためた。

下田女史か平尾家祖先の御はなし筆記

平尾家は清和源氏にて戦国時代平尾伯耆なる者武田家に属せりとのみにて祖先詳かならざりしか今に至りて発顕せり祖先は新羅三郎義光より出でて久しく信州に住せり此の間系図連綿として存す武田家に属したる頃は信州国佐久郡に居城あり平根^尾横尾^尾の二個村に跨りしを維新の頃二村を合して平根村と称し城跡のある所は字平尾といふ伯耆良信の曾孫守芳仏教を信し曹洞宗の一寺院を上平尾に建立し守芳院といふ墓地は城外にありし由なれとも多くは度々の戦場に荒れて僅に存せるものを院の地内に引けり而して其の附近の村々ハ平尾氏之を支配せしものゝことし勝頼か目白山にて生害武田家の没落と共に平尾家も断絶して当時幼少の子らは散りくゝに流浪その内の一人の子孫即ち守芳の子転々して美濃国岩村藩に奉仕平尾平左衛門と称し爾後継承して維新に及へりさて平尾家は潰れたるも守芳院はあとに残り平尾家の供養を世々絶えず執行し伝へて今日に及へり当住職岡本氏の篤志其の平尾家の末葉をさかすに当り歌子は平尾家の出なりとき、来りて此事をつく茲に初て其の由来を知ることを得たり是非参拝せよとの勧めに依り繁務のうちを御願申上げ今年四月廿三日立越したりしに村の人々は旧主の来臨として途にむか

へ案内につれ守芳院に至れハ曹洞宗にてさのみ大寺といふにハあらねと相当の建物にて開基即ち祖先の位牌もあり又証拠となるへき品も少なからず全く城郭のうちにあるもの、由寺ハ山の半腹に在りていかさま城の跡と見ゆる所なり法会を営み携へし菓子実ハ特に女史に御下賜の品を供へ村の人々も皆参詣し昔を思ふ志の篤きそのさまの質朴殊勝なるそゝろに感涙を催したり氏神の外に平尾大社正八幡といふあり是は祖先か特に氏の神として祭りしもの、由現在の殿宇も守芳か再建せしものなりしと此村は信越線御代田駅より東北の方へ入ること二里余の所にありき

右は誠に目出度御物語聞きたにうれしくそのまゝを記して歎ひをわかつと云ふ

大正九年四月三十日

清水廣博

【実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館蔵 下田資料
出納番号2949、縦二十五・五cm×横五十一・六cm】

「琴臺東條先生建碑除幕式式辞」

式辞

維時大正十年五月二十二日琴臺東條先生ノ碑竣功ヲ告ケ除幕ノ式ヲ
举行ス謹シテ按スルニ先生名ハ信耕字子蔵文左衛門ト称シ末年源右
衛門ト改ム父享哲本国ハ信濃ニシテ江戸ニ住シ医ヲ業トス先生ハ寛
政七年六月ヲ以テ生レ幼名○義蔵ヲトイフ四書五経ヲ父ニ受ケ十五
六歳ニシテ伊東藍田倉成龍渚尾藤二洲山本北山亀田鵬齋等ニ就キ学
フト雖モ専ラ太田錦城ニ師事シ青年已ニ頭角ヲ顯ハス偶々美濃岩村

藩ノ文臣平尾欽蔵子ナク嗣子ノ選ヲ太田錦城ニ求ム錦城先生拳ク文
政十年二十三歳ニシテ平尾家ニ入り欽蔵ノ三女貞子ヲ配トシ欽蔵ヲ
生ム幾モナク故アツテ一家ノ合意ニ依リ先生ハ平尾家ヲ辞去シ独立
セラル其遺子録蔵氏ノ長女セキ子ハ即チ今ノ下田歌子女史ナリ先生
ハ又林家ノ門ニ入り尋テ幕府ニ仕ヘ又辞シテ民間ニ下リ文人墨客ヲ
集メ書画会ヲ酒樓ニ開キシ故ヲ以テ林家ノ破門ヲ受ク是ニ於テ再ヒ
朝野ノ文士ヲ招キ大ニ宴ヲ張ル世之ヲ破門会ト称シ名声大ニ揚ル專
ラ意ヲ著述ニ用ヒラレ數十種ニ及フ其最タルモノヲ先哲叢談続編ト
ナス博聞強記実ニ非凡ノ人ト謂フヘシ当時榊原家ニ於テ明史稿ヲ上
梓シ儒臣ヲ召シテ之カ訓点ヲ為サシメラル、ニ当リ先生ヲ聘シテ寛
永系譜三百七十四卷ノ校訂ヲ命セラル藩主政令公先生ノ非凡ナルヲ
知り先生モ亦其知遇ニ感シ終ニ弘化四年榊原家ニ臣属セラル翌嘉永
元年伊豆七嶋岡考ヲ編シ尋テ刻成ル其三年之カ為ニ幕府ニ譴責セラ
ル四年五月依然江戸ニ留メテハ更ニ累ノ及ハンコトヲ察知シ幕府ニ
請ウテ先生ヲ高田ニ下シ謹慎セシメラル先生ノ安全ナリシハ之カ為
ナリ又先生ヲ高田ニ下サレシハ尚他ニ理由アリシカ如ク推察セラル
其ハ当時高田ハ程朱ノ学行ハレ専ラ彝倫ノ道ヲ講シ自然經濟ノ道ニ
疎ク時勢ニ副ハサルノ憾アリ之カ改善指導ノ為ニハアラサリシカ然
レ共因襲ノ久シキ容易ニ移ラサルノミナラス却テ敬遠主義ニ傾キ
先生モ忌憚ナク意見ヲ吐露シ果ハ暴言ニ涉ル事アリ以上ノ情勢ナ
ルヨリ藩士ノ門人ハ極メテ少ナク市在ノ門人ニ対シテハ經濟ノ実功
ヲ説キ大八車ノ行ハレシモ実ニ先生ノ指導ニ依ル是レ市在ニ門人ノ
多カリシ所以ナラム時勢ハ安政文久元治ト進行シ先生ノ所説モ着々
実現スルニ至リ漸次信用ヲ高メ文久年間將軍○上洛榊原家先驅ニ当
リ家先生ノ扈從ヲ必要トシ内願アリシモ幕府之ヲ許サレサリキ慶応
年間藩学ヲ興スニ当リ先生ヲシテ之カ館長タラシム庶民ヨリ倉石典
太ヲ拳ケ教官タラシメタルモ先生与テ力アリシカ如シ先生モ漸ク発
展ノ緒ニ就キタリシニ維新ノ始メ早クモ政府ニ召サレ宣教少博士ト
為リ尋テ亀戸ノ祠官トナリ後年不幸失明明治十一年八十四ヲ以テ
東京神田ニ歿セラル先生ノ榊原家ニ縁アルト高田ハ先生ノ災禍ヲ免

カレシメタル再生ノ紀念地タルトヲ以テ碑ヲ茲ニ建テ永遠ニ其名
声ヲ伝ヘント欲シ大正八年之ヲ発企セシカ朝野名士ノ贊助ヲ得テ今
全ク成リ旧城外神祠ノ前鬱々タル樹林ノ間豊碑ノ巍立スルヲ見ル而
シテ外孫下田女史ハ來高シテ其幕ヲ除カレ朝野貴賓ノ來臨ヲ辱ウセ
シハ発起者及會員一同ノ深く感謝スル所ナリ聊蕪言ヲ陳シテ式辭ト
ス

大正十年辛酉年五月二十二日

門人 從六位勲六等清水廣博

【実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館蔵 下田資料

出納番号2954、仮綴、縦二十四・三cm×横十六・六cm】

（*を付した箇所は虫損のため、注11所収の「式辭」に抛りこれを補った。）

【付記】

本稿に関わる資料閲覧等について、岩村歴史資料館、実践女子大
学・実践女子大学短期大学部図書館にご高配いただいた。ここに記
して深甚の謝意を表します。

くぼ・たかこ／下田歌子記念女性総合研究所 専任研究員

Shin-Etsu Kiko and Utako Shimoda's Awareness of the Ancestors:
Thoughts on the Erection of Tojo Kindai's Inscription

KUBO Takako

The travel journal *Yomogimugura* was compiled as *Kosetsu Soshō*, Vol. 1, *A Collection of Utako Shimoda's Handpicked Writings* (November 1932, Jissen Girls' School Publishing). It contains 20 travelogues and essays written by Shimoda. The book contains *Shin-Etsu Kiko* and *Shin-Etsu Kiko Koki* (postscript). These include *hinamino nikki* (journal), a set of diaries covering the 30 days from August 9 to September 7, 1899. *Shin-Etsu Kiko* comprises 80 tanka poems (58 by Shimoda and 22 by others), while *Shin-Etsu Kiko Koki* includes 26 (22 by Shimoda and four by others). Although researchers occasionally mention *Shin-Etsu Kiko* in Shimoda's biographies and other similar materials, no discussion has focused on the writing. This paper analyzes the work to explore Shimoda's whereabouts and practices at the time of the founding of the Imperial Women's Association and considers her awareness of the ancestors underlying it.